

肩を押し買ふべき日記探しけり  
門限をせずよくはずむ年忘れ  
耳さとき老にまけまじ歌留多会  
左義長や北国の日のいま上る  
大とんどさながらネロの焚くごとく  
ロザリオを繰る胼の手をいたはりぬ  
焼却炉火を吐いてをる雪間かな  
臣虚子と詠みし筑紫の野を焼ける  
民宿の椀の重さよ田螺汁  
長旅の第一日目西行忌  
舷に立小便や鳥雲に  
田楽やいと鄙びたる塗りの箱  
黒潮のおもてきらめく椿かな

一女性長き祈りや春の昼  
虚子いますごとく貴船の落花かな  
思ひ川こゝよと落花たゝみかな  
東山西山花の虚子忌かな  
公園も湖のうち凧  
寺の松賞むる遍路の寄りにけり  
人丸忌長押三十六歌仙  
天がかかる藤のこぼせし花ならむ  
広葉うちさわぎて朴も花開く  
提灯に似たりバナナの袋掛け  
短夜のダウンタウン街夜を知らず

二〇一八年一〇月二三日